

## — 資 料 —

# 宣教看護婦リンダ・リチャーズの来日時の足跡 ～京都看病婦学校での看護教育の開始まで～

Following footsteps of missionary nurse Linda Richards coming to Japan  
– until start of nursing education at Kyoto Training School for Nurses

岡山寧子

Yasuko Okayama

## 抄 録

アメリカ最初の訓練看護婦であるリンダ・リチャーズは、京都看病婦学校での看護教育を担うため、1885（明治18）年の年末にアメリカを出発、翌年の1月横浜に到着した。京都での看護実践や教育の開始はそれから約7か月後のことであった。本稿では、彼女自身の回想記やアメリカン・ボード宛ての書簡などから、アメリカでの看護キャリアから異国の地日本での宣教看護婦の道を選択したL.リチャーズの思い、そしてアメリカ出発から京都へ至る足跡とその間の日本体験を探った。

L.リチャーズは、来日してすぐに京都には留まることはなく、その年の夏まで、個人付き添い看護や伝道活動で上海や岡山などに赴き、アメリカン・ボードの宣教師ネットワークの中で宣教看護婦としての役割を少しずつ果たしながら過ごした。この間の経験は、彼女の抱いていた宣教看護婦としての夢と現実の狭間で、喜びを感じつつも戸惑いと苦悩の連続であったことがうかがえた。この年の秋の始まる頃、彼女は京都の地でいよいよ看護実践と教育を開始することになり、彼女はアメリカとイギリスで長年培ってきた看護キャリアをやっと発揮できる時がきたことに安堵し、期待をもって取り組んでいったと思われる。あわせて、来日してからの様々な体験を通して、日本という文化の中で、新たな挑戦となった宣教師としての使命をどのように果たしていくのかをより鮮明に実感し、医療伝道の進め方を模索していたと推測された。

キーワード：リンダ・リチャーズ、宣教看護婦、看護キャリア、京都看病婦学校

## 1. はじめに

今から135年前、1886（明治19）年の秋、京都の地で近代的な医療活動と看護教育が始まった。同志社病院と京都看病婦学校（以下、看病婦学校）である。近代看護教育の開始としては、日本において2番目、西日本では最も早かった。病院と看病婦学校は、同志社の創立者新島襄により設立された。当初、新島はアメリカの海外伝道団体アメリカン・ボード（American Board of Commissioners for Foreign Missions, 以下ABC FM）の支援のもと、同志社の大学化とともに医学部設立を目指して奔走した。残念ながら、その実現には至らなかったが、その流れの中で病院と看病

婦学校での近代的な医療と看護教育が開始されたのである。ABC FMの宣教医ジョン・ベリー（John Cutting Berry, 1847-1936：以下、J.ベリー）を病院長、同じく宣教看護婦リンダ・リチャーズ（Melinda Ann Judson Richards, 1841-1930：以下、L.リチャーズ）を看護監督者に迎え、フローレンス・ナイチンゲール（Florence Nightingale, 1820-1910：以下、F.ナイチンゲール）による看護を参考にした先進的な看護実践や教育がすすめられた。1888（明治21）年、初めての卒業生4名を輩出した（本井・岡山・石川, 2015, pp.8-23）。

病院・看病婦学校の運営は軌道に乗りつつあったが、開始から約10年後、存続の危機に直面した。

1897（明治30）年、同志社はそれらの管理を、当時同志社病院産科医であった佐伯理一郎（1862-1953）に委ねた。彼は実質的に病院・看病婦学校の運営をすすめる、併せて京都産院や佐伯病院を開院した。1906（明治39）年には同志社病院は閉鎖、看病婦学校は同志社の手を離れた。その後1951（昭和26）年の閉校まで、学校長佐伯の尽力により京都看病婦学校の名前と看護教育が受け継がれた（遠藤・山根，1984，pp.125-170）。

看病婦学校の初代看護監督者であったL.リチャーズは、アメリカにおいて最初に近代的な看護教育を受け、広く活躍した訓練看護婦 The First Trained Nurse in America と称される歴史的な人物である。1911（明治44）年、彼女が70歳の時に回想記 *Reminiscences of Linda Richards*（以下、回想記）を出版し、それまでの自身の足跡を詳しく述べている。それによると、彼女はボストンにあるニューイングランド婦人子供病院看護学校を1873（明治6）年に第1回生として卒業、その後、ニューヨークのベルビュー病院の夜間看護監督やボストン・マサチューセッツ総合病院看護学校監督を経て、1877（明治10）年渡英、F. ナイチンゲールの支援のもと、聖トマス病院などで看護教育・管理の研修を積んだ。帰国後、ボストン市立病院看護学校の看護監督としてその発展に尽力した。

これらの経験を積んでいく中で、彼女は『私の務め duty』として日本での看護教育・看護活動を決意したと述べている（回想記，2011，p.66）。来日したのは1886（明治19）年1月、39歳の時であった。その後の約5年間、同志社病院・看病婦学校の開設・運営・看護教育に尽力した。慣れない日本での教育運営は心労も大きく、休養しながらの活動ではあったが、彼女はアメリカやイギリスで培ってきた近代的な看護を日本に導入するために多大な力を注ぎ続けた。日本での活動開始から2年近く経った頃、徐々に体調を崩し、一時帰国や日本各地で静養したりしたが、結局、来日5年経った頃には職を辞し、1890（明治23）年に帰国している（回想記，2011，p.96）。アメリカに戻った後は、再び多くの看護実践・教育の場での指導に当たり、1911（明治44）年に現役を引退するまで長らく看護の発展に貢献した。その後も執筆活動や後輩へのサポートなどを通してアメリカの看護界との繋がりを続けたが、1930（昭和5）年89歳で母校ニューイングランド婦人子供病院にて死去、ボストン郊外のフォレストヒルズ霊園にて眠っている（岡山・依田・

竹中，2006，p.271）。

彼女の長い看護人生において、当時アメリカにいれば近代看護のパイオニアとして先頭に立って活躍できる立場にあった時期に、なぜ宣教看護婦という道を選択し、はるばる京都の地にて看護教育・実践に身を投じたのか、京都でのほんの短い看護活動へのチャレンジは彼女の看護キャリアにどのような意味があったのだろうか。日本での看護教育・実践に大きな希望をもって来日したと想像できるが、離日に至るまでの内面的な詳細はあまり明らかにされていない。そこで、本稿ではアメリカ出発から日本到着、京都に着くまでの体験、目にした光景、何を思い、どのような道程で京都に到着したのかなど、宣教看護婦L.リチャーズのアメリカ出発から京都へ至る足跡をたどりながら、その一端を探ってみたい。

## 2. 研究方法

使用した主な資・史料は、以下の通りである。

1) Linda Richards (1911): *Reminiscences of Linda Richards, America's First Trained Nurse*. Boston (USA). Whitcomb & Barrows. 本文中の引用箇所には（回想記，1911，p.○）と表記した。なお、この書は尾田葉子により翻訳され、「リチャーズの回想記 [1-10]」として、雑誌「看護の科学」で、1976～1978年に連載されている（詳しくは文献参照）。

2) アメリカン・ボード宣教師文書 *Correspondences of the American Board (ABCFM) 1869-1896*（同志社大学人文科学研究所蔵、マイクロフィルム）。この中で、L.リチャーズが主としてABCFMに宛てた書簡61通（以下、書簡）のうち、アメリカ出発から京都での看護教育の開始までの6通 [1885（明治18）年9月8日～1886（明治19）年7月30日付]を中心に、それらに関連する他の宣教師の書簡も含めて利用した。本文中の引用箇所には次のように示した。例えば、L.リチャーズからアメリカン・ボード本部の渉外幹事N.G.クラーク宛の1886（明治19）年7月3日付書簡の場合、（L.リチャーズ書簡，LR to NGC，1886.7.3）と表記した。

3) L.リチャーズの日本の入国・出国については、*Japan Weekly Mail* : 2007, 横浜開港資料館監修、紀伊國屋書店）やヒョーゴ・ニュース（*The Hiyogo News* : 複写、神戸市文書館蔵）などから確認した。*Japan Weekly Mail* は、1870（明治2）年横浜居

留地の英国系新聞として発刊され、当初の貿易・船舶や横浜港発着の来日外国人などの記事がある。ヒョーゴ・ニュースは、1868（明治元）年神戸で発刊された週刊英字新聞で、貿易や商業に関する内容の他に、当時兵庫港を発着した客船の乗客名簿がある。

なお、現在の呼称「看護師」について、本報告では歴史的な存在としての「看護婦」「看病婦」を用いた。

### 3. L.リチャーズの来日までの看護キャリア

#### 1) アメリカで最初に訓練された看護婦 First Trained Nurse in America

L.リチャーズは、1873（明治6）年ニューイングランド婦人子供病院看護婦学校を卒業し、アメリカでの最初の訓練看護婦となった。その病院は、当時の女性解放運動思想を背景に、医学に挑戦した先進的な女医達が、女性に対して良質なケアを提供すること、女医にふさわしい研修の場（病院）を提供すると共にそこで働く看護婦に医学や専門的な看護知識を提供することを目的に掲げ、女医による看護婦の教育を実践していた。L.リチャーズは、主に女医スーザン・ディモック（Susan Dimock, 1847-1875）から教育を受けた（岡山・依田, 1996, pp.21-26）。彼女はスイスで女医となり、帰国後に女性への医学や看護教育に尽力した。また、この病院の設立・運営にあたったマリー・ザクルゼスカ（Marie Elizabeth Zakrzewska, 1829-1902）は、女性による女性のための医療のあり方を探究し続けた女医である（V.G.Drachman, 1984, pp.21-43）。彼女はアメリカで医学校を卒業した最初の女医エリザベス・ブラックウェル（Elizabeth Blackwell, 1821-1910）に師事した。イギリス生まれのブラックウェルは、生涯女性への医学教育に貢献した一方で、F.ナイチンゲールとも長く親交を持ち、看護教育についてもかなり深い意見交換をした足跡がみられる（岡山, 2021, pp.135-146）。これらを考えると、医師が看護教育を担っていたとしても、同じ女性の立場で、良質の医療の提供、自立した専門職養成という観点から、当時としては近代的な看護教育を実践していたことがうかがわれる。L.リチャーズは『…私たちパイオニア看護婦は、学びたいという強い気持ちで入学し、…学んだことは完璧に自分のものとし、それが後年の積み上げへの確かな基礎となった。…』と述べている（回想記, 2011, p.14）。

L.リチャーズが看護婦となった1873年当時、アメリカでは、F.ナイチンゲールの看護教育システム

を導入した学校が相次いで開設され、その後急増、発展していくが、その過程でアメリカ型の看護教育の原型が形成されていく（依田・岡山, 1993, pp.1-15）。彼女は、ベルビュー病院看護学校夜間監督、マサチューセッツ総合病院看護学校看護監督として看護実践・教育に携わった。その過程で、L.リチャーズは『看護学校の組織という特別な仕事にもっと深く関わりたい・・・』『F.ナイチンゲールのもとで看護学校の仕事を学びたい・・・』という思いが強くなり、その研修の実現に向けて準備をすすめた（回想記, 2011, p.32）。1877（明治10）年に渡英、F.ナイチンゲールの支援を受け、聖トマス病院、キングスカレッジ病院やエジンバラ王立病院で約7ヶ月の研修を積んだ。L.リチャーズは、『私は病院で過ごした長い年月で数多くの幸福にめぐり合ったが、最大の名誉はF.ナイチンゲールに会い、彼女を知ったことである・・・』（回想記, 2011, p.39）と述べており、その後の彼女の看護人生に大きな影響を及ぼしたことがうかがわれる。この時、F.ナイチンゲールから具体的にどのような教育プログラムを学び得たかはほとんど明らかではないが、彼女は、研修を通じてアメリカとイギリスとの看護事情の違いなどを肌で感じ、今後の看護実践・教育への抱負を胸に、帰米したと思われる。

#### 2) ボストン市立病院での看護学校開設・運営への挑戦

L.リチャーズのアメリカ帰国後の初仕事は、ボストン市立病院での看護学校開設と運営であった。ボストン市立病院は、1878（明治11）年にL.リチャーズを看護監督に迎え、看護婦学校を開設した。市立病院の看護婦同窓会誌 Historical Sketch (M. M. Riddle, 1928, pp.14-21) には、この開設は当時病院長のエドワード・カウルス医師（Edward Cowles）の優秀な看護ケアの提供への度重なる努力の結果であり、L.リチャーズもその考え方に賛同、学校づくりに尽力したとある。また彼女は、病院での看護業務・看護教育の管理を、それまでの外部組織であった運営体制から病院運営の中に取り込み一本化し、より効果的で円滑な運営を確立した功労者として評価されている。これは、その後アメリカで発展する、いわゆる病院付属の看護学校の原型を形成したということにつながっていると考えられている。つまり、教育の財政的独立を目指したF.ナイチンゲールの教育システムとは異なるアメリカ独自の教育制度に変容していった足跡でもあった（依田・岡山, 1993, p.12）。L.リチャー

ズは、F. ナイチンゲールから学んだ看護実践・教育のあり方をアメリカ社会の状況に適応させながら、リーダーシップを発揮し、看護教育を通して病院看護・看護教育の改革を実践したのではないかと推測される。彼女は『看護学校は開学1年で病院の看護レベルが上がり、患者はよりよいケアを受けるようになった』『私にとって組織の仕事の最初の努力の結実…』(回想記, 2011, p.61)と述べ、そこでの役割遂行への達成感が大きかったことがうかがえる。

このように、L. リチャーズは、ニューイングランド婦人子供病院看護婦学校にて女医から、当時としては先進的な看護教育を受け、アメリカ最初の訓練看護婦となった。卒業後、看護実践を積み重ねていく中で、さらに質の高い看護実践や教育をさらに学びたいと考え渡英した。F. ナイチンゲールから看護実践・教育のあるべき姿を改めて学び、深い感銘を受けたことは、その後の彼女の看護人生に影響する。彼女はそれらを土台としてアメリカ社会の状況に対応した形での看護をボストン市立病院にて具現化していった。その達成感とともに、次のキャリアのステップ、宣教看護婦としての新しい挑戦に突き動かされていく。

#### 4. 宣教看護婦 L. リチャーズ始動

##### 1) 宣教看護婦 L. リチャーズ、日本に向けてアメリカを出発

L. リチャーズが、ABCFMにおいて日本での看護教育ができる人材を募集していることを耳にしたのは1885(明治18)年の初め頃であった(回想記, 2011, p.66)。これは、かねてから新島襄やJ. ベリーがキリスト教に基づく医学教育や医療実践の実現に向けて奔走していた時期でもあり、結果的に看病婦学校と病院の設立の方向に動き出していた。J. ベリーは募金活動、診療や看護教育に必要な書籍や機器などの調達、中でも専門的な教育を受け、経験豊かな人材の確保に力を注いだ(小野, 1999, p.329)。J. ベリーとL. リチャーズがこの時期に面識があったかどうかは不明であるが、彼女はこの仕事への奉仕を申し出た(回想記, 2011, p.66)。J. ベリーも彼女の評判から「看護婦として有能でクリスチャンとして品性を備えた人材」と、ABCFMに推薦している(J. ベリー書簡: JCB to NGC, 1885.5.4)。この日本派遣の実質的な支援は、ABCFMと協働していたウーマンズ・ボード(Woman's Board of Missions of the Pacific: 以下、WBM)が担った。WBMは1885(明治18)年8月末、

日本の京都での看病婦学校開設のためにL. リチャーズを採用することを投票で決定した(M. E. Doona, 1996, p.103)。この結果を受け、彼女は『私は神の力を借りて、私に任命された仕事を成し遂げ、その仕事を誠実にやり遂げたいと思います。』と京都での活動への期待をABCFMへの書簡の中で述べている(L. リチャーズ書簡: LR to Dr. Alden, 1885.9.8)。

##### 2) 1886(明治19)年1月21日横浜に到着

かねてから宣教看護婦としての役割を担うために準備を進めていたL. リチャーズは、1885(明治18)年11月20日にはボストン市立病院を退職、数日後ボストンを出発し、アメリカを横断、ロスアンゼルスにて友人たちとクリスマス休暇を過ごし、年末にサンフランシスコからハワイ経由で横浜に向けて出発した(L. リチャーズ書簡: LR to NGC, 1885.11.18, LR to NGC, 1885.11.26)。ジャパン・ウィークリー・メール(Japan Weekly Mail)の1886(明治19)年1月23日付によると、1885(明治18)年12月29日サンフランシスコ発、1886(明治19)年1月21日横浜着のCity of Sydney号(American steamer)の到着者名簿に彼女の名前がある。途中、1月6日にはハワイ・ホノルルに寄航している。ホノルルでは、地元病院を見学、何人かの宣教師やOafu大学(現、ハワイ大学ウエストオアフ校 University of Hawaii at West Oahu)の学長たちと出会っている(L. リチャーズ書簡: LR to NGC, 1886.1.27)。

彼女は、船中からみた富士山の美しさに感激し、横浜に到着してからは日本の風景や人々の姿に目を見張り、『日本は美しい』と感じたようであった。翌日、外国人居留地に住むH. ルーミス(Henry Loomis)を訪問した。彼は長老派教会の宣教師で、彼女の訪問時はアメリカ聖書協会日本支局主幹として活躍していた。また、彼と親交のあったJ. ヘボン(James Curtis Hepburn)にも会っている(L. リチャーズ書簡: LR to NGC, 1886.1.27)。J. ヘボンは長老派教会の宣教医で、医療活動はじめ聖書の翻訳、英和辞典の編纂、教育など幅広く活躍していた。1883(明治16)年開催の日本プロテスタント宣教師全体会議においてなされた「日本での看護教育の推進」についての議論に対して、彼は時期尚早と推進反対の立場をとっており(亀山, 1888, pp.20-30)、看護教育を指導するために来日したL. リチャーズとは、日本や京都の諸事情、キリスト教伝道と看護教育に関すること

などが話題に上ったと推測されるが、詳細はわからない。

1886（明治19）年1月30日付のジャパン・ウィークリー・メールによると、L.リチャーズは、1886（明治19）年1月23日横浜発、神戸・長崎経由、香港行き Teheran 号（British steamer）に乗り込み、神戸に向かった。

### 3) 神戸・京都到着、そして夫人宣教師の個人付き添い看護のため上海に向かう

横浜出発の翌日1月24日、L.リチャーズは神戸に到着、ABCFM 神戸ミッションのD.ジェンクス（Dewitt Clinton Jencks）宅に滞在した。この間の出来事のみてみると（L.リチャーズ書簡：LR to NGC, 1886.1.27）、まず ABCFM の宣教婦人である E.タルコット（Eliza Talcott：1836-1911）たちと出会う。彼女は、長年日本での伝道活動をしながら神戸の女学校（現、神戸女学院）の設立・運営などに尽力した人物で、L.リチャーズが日本に滞在している間、何かと支援することになる。1月25日に、L.リチャーズは E.タルコットたちと共に日本人宅での集会に行く。日本風の挨拶、正座で日本茶を飲み、歓談するなどを経験した。また、J.ベリーの訪問を受け、共に京都に向かい、看護学校購入予定地を見学した。彼女はこの時、学校設立の具体的なイメージを描くことができたが、実現はまだ先であることも実感したにちがいない。あわせて、彼から京都在住の宣教師 J.デービス（Jerome Dean Davis）の夫人が体調を崩し、上海での転地療養をすすめているが、上海まで彼女に付き添うことを打診された。L.リチャーズはその要請を「神の導き」ととらえ、了承した。J.ベリーの書簡によると、彼は当初 E.タルコットを付き添いにと考えていたが、L.リチャーズが適任と判断、変更した。L.リチャーズはデービス夫妻たちとともに神戸に戻り、神戸を出発、長崎に数日滞在後、上海へ向かうと述べている（J.ベリー書簡：JCB to NGC, 1886.1.28）。彼女の書簡でも1月31日は長崎行きの船内におり、日本船なので小型で居心地が悪いと訴え、デービス夫妻たちと上海に向かっているとあった（L.リチャーズ書簡：LR to NGC, 1886.1.27）。1886（明治19）年1月30日付のヒョーゴ・ニュースによると、実際に1886（明治19）年1月29日神戸発、上海行きの広島丸（日本郵船）に乗船したようである。このことは、L.リチャーズには宣教看護婦として、看護教育だけでなく宣教師の健康管理への役割をも期

待されていたことがわかる。彼女は上海滞在中も日本語を学びたいという希望を持ち、日本での看護活動や看護教育への熱意を示しているが、日本での看護教育に携わるのはまだ先であった。

### 4) 再び日本へ、そして岡山での伝道活動

L.リチャーズが上海から神戸に戻るのには、神戸を出てから2ヶ月余り後の1886（明治19）年4月4日である。1886（明治19）年4月5日付のヒョーゴ・ニュースに、上海発、神戸着の名古屋丸にデービス夫人と共にL.リチャーズ到着の記事がみられる。上海滞在中の詳細は不明であるが、ベリーの書簡では、デービス夫人の回復がはかばかしくないために、神戸経由でアメリカに帰国予定とあった（J.ベリー書簡：JCB to NGC, 1886.3.20）。上海から日本に戻るL.リチャーズを助けるため E.タルコットが上海に派遣され、共に日本に戻ってきた（J.ベリー書簡：JCB to NGC, 1886.4.20）。L.リチャーズは、日本に戻ってからはしばらくは神戸に留まった。1886（明治19）年4月7日付のヒョーゴ・ニュースによると、デービス夫人は4月6日の夕方、神戸から横浜行きの名古屋丸（日本汽船）に家族や医師、宣教師たちに付き添われて出発した。不幸なことに、夫人は翌日の4月7日の夕方、下田沖で船上から投身自殺をとげた。この時の様子やその後の周辺の状況などは、森永がその詳細を述べている（森永, 2004, pp.327-356）。L.リチャーズの書簡や回想記には、それについての記述はほとんどみられない。彼女の書簡はそれから約5か月間は途絶えていた。その年の7月にやっと書かれた書簡には、『…上海からの帰国後1～2週間は仕事を始めるにはあまりにも疲れていて何もできず…』（L.リチャーズ書簡：LR to NGC, 1886.7.30）と述べている。慣れない上海での生活やデービス夫人の世話そして夫人の死に直面し、彼女が深い悲しみと共に身も心も疲労困憊し、日本でのこれからの活動に対して戸惑いを持ち、不安が募っている様子がうかがわれた。

それでも、L.リチャーズは、神戸でしばらく休養した後、E.タルコットの伝道活動に同伴して岡山に向かい、姫路や高梁にも足をのばしている。地元紙の山陽新報（現、山陽新聞）の1886（明治19）年6月24日付には、京都看病婦学校に招かれたアメリカで有名なL.リチャーズが岡山に滞在していると報じている。L.リチャーズは、E.タルコットが地元住民と共に精力的に活動している様子を述べている（L.リ

チャーズ書簡：LR to NGC, 1886.7.30)。また、回想記には、この岡山滞在中コレラが流行し、L. リチャーズらは6週間隔離された。彼女は直ちにコレラの避病院で働く旨を行政に申し出たが、丁重に断られた。しかしその申し出が美談として地元の新聞で紹介されたと述べている（回想記, 2011, p.66)。このことは、1886（明治19）年6月24日付の山陽新報の第一面に大きく取り上げられた（山陽新報, 第2133号)。その見出しには『看病婦養成の急務を論じて傍らリチャード嬢の篤志に及ぶ』とあり、F. ナイチンゲールのクリミア戦争での従軍看護や看護婦教育などでの活躍を紹介した上で、岡山に来たL. リチャーズの避病院での支援の申し出の顛末を美談として掲載している。この記事は、それにとどまらず同年発行の女学雑誌第29号にも紹介された。この雑誌は、当時の本格的な女性啓蒙誌であった。それによって、京都で看病婦学校就任予定のアメリカの看護婦が来日し、岡山でのコレラ対策に果敢に取り組もうとした姿が広く知られることとなった。また、女学雑誌には、すでにその前号（25, 26号）に京都看病婦学校の設立趣旨や看護指導者としてL. リチャーズの経歴などが掲載されており、その続きとして、改めて彼女の岡山での活動が紹介された形となった。このことは、当時の日本ではまだほとんど知られていなかった訓練を受けた看護婦とその活動、そして看護婦養成の必要性を日本社会に伝えることに繋がったのではないかと思われる。にもかかわらず、L. リチャーズは、岡山での生活はとても楽しかったとする反面、『自分は役に立っていないと感じる』と述べている（L. リチャーズ書簡：LR to NGC, 1886.7.30)。岡山での生活に少しずつ慣れていく中で、伝道活動だけでなく、何よりも来日の主な目的であった看護の教育や実践にいま携わることが出来ていないことへのいらだちをみせていることがうかがえる。

## 5) いよいよ京都へ

1886（明治19）年6月24日付の岡山新報には、岡山滞在中のL. リチャーズは7月下旬頃には京都に向かう予定とあり、実際には7月末には避暑のために京都比叡山で過ごしていることが彼女の書簡からわかる（L. リチャーズ書簡：LR to NGC, 1886.7.30)。ABC FMでは、当時夏期中は、避暑のために多くの宣教師やその家族が比叡山キャンプで過ごし、ABC FMの集会も行われていたようである（L. リチャーズ書簡：LR to NGC, 1886.7.30)。その中で、

彼女は休暇を過ごし、多くの宣教師たちとの交流を通して、日本での彼らの活動を知り、自身のこれからの行く方向を考えていたのかもしれない。J. ベリーの書簡では、L. リチャーズは今までのほとんどを岡山で過ごして、日本語も上達し、新しい仕事の準備に入っていると述べている（J. ベリー書簡：JCB to NGC, 1886.8.26)。また、2週間後には京都に戻り、旧デビズ邸を仮施設として診療を開始すること、5～6人の患者ケアのためには看護助手が必要なこと、土地購入や病院運営のための資金調達についてなどの記述があり、この避暑期間にL. リチャーズはJ. ベリーと共に京都での病院と看病婦学校の開設準備を精力的に始めている様子がみられる。京都での看護教育と診療活動のはじめの場となる宣教師館旧デビズ邸の一角に落ち着くのは、比叡山で約1ヶ月半過ごした後の9月初旬頃と推測される。

## 5. 宣教看護婦L. リチャーズの京都看病婦学校での職務遂行までのレディネス

### 1) なぜ、日本での看護キャリアを選んだのだろうか。

当時、アメリカでは医療の近代化が進む中で、看護実践・教育も急速に発展する時代を迎えていた。彼女はそのパイオニア的な存在として、先頭に立ち、広く活躍していたのは間違いない。にもかかわらず、その職を辞して、なぜ日本での新しい仕事に対して、『私の務め duty』という思いを馳せたのだろうか。

L. リチャーズは、彼女の一家は敬虔なクリスチャンであり、父親を早くに亡くした彼女は、特に信仰に厚かった祖父から多くの貴重な助言を受けたと述べている（回想記, 1911, p.2)。また、M.E. Doonaは、彼女が幼少の頃から宣教師になりたいと考えていたと指摘している（M.E. Doona, 1996, p.101)。

一方で、彼女は、生まれながらの看護婦と称され、若い時から家族や身近な人々が病気の時に世話をする役割を担ってきた。その様々な経験を通して、自分の人生を病める人、苦しむ人へのケアに捧げようと考えようになった。しかしながら、当時は看護婦の養成学校もなく、訓練を受けた看護婦もいない中で、専門的な看護技術の指導を受けたい、本当の看護婦になりたいと、その道を積極的に模索した。そこでたどり着いたのが、女医が主導するニューイングランド婦人子供病院看護婦学校であった。当時の女性解放運動思想を背景に、医学・医療に果敢に挑戦した先進的な女医

達との出会い、専門的な看護を知ることになる。卒業後は、訓練を受けた看護婦としてのキャリアをスタートしたが、だんだん看護婦の育成に関わりたい、その専門的な研修を E. ナイチンゲールから学びたいという思いが強くなり、それを実現した。そして、彼女は苦しいながらも、それらを土台にしてアメリカ社会の状況に対応したかたちでの看護・看護教育をボストン市立病院において具現化した。この時、彼女は大きな達成感を味わうが、その職務の厳しさゆえに体調を崩した経過もあり、そこでの行き詰まりもあったのかもしれない (M.E.Doona, 1996, p.99)。あわせて、E. ナイチンゲールを基本としているにしても、アメリカ社会の状況に適應させ、急速に発展していくアメリカの医療・看護の現状と彼女自身がパイオニア的に培ってきた看護アイデンティティとの違和感のような思いがあったのではないかとともうかがえる。

そんな時、ABCFM が京都での看病婦学校設立のために看護婦派遣を求めていることを耳にし、自身のこれまでのキャリアが生かせる仕事かもしれない、しかも彼女が幼少時にあこがれていた宣教師になりたいという記憶が甦り、今なら実現することができるのかもしれないと考えたのではないだろうか。また、当時アメリカにおける近代看護の発展は急速にすすみ、様々な形の看護教育が展開されていく中で、新たに海外での看護教育に携わることを模索したのかもしれない。あわせて、キリスト教における女性の海外伝道の気運が高く (齋藤, 1999, pp.33-38)、その流れの中で医療伝道という役割を担うことが自身の努め duty と考えたのではないだろうか。いずれにしても、彼女のこの挑戦が、日本における近代看護導入へのコーナー・ストーンの一つとなったのは間違いない。

## 2) 日本到着から京都での看護教育開始に至るまでの宣教看護婦としての活動

L. リチャーズは、1886 (明治 19) 年 1 月 21 日夜、横浜港に到着、同月 24 日には神戸港に着いた。間もなく、J. ベリーらと共に京都に赴き、同志社病院・京都看病婦学校設立予定地の見学や準備状況の説明を受けた。この時、彼女は京都到着に安堵した一方で、設立までにはまだ時間がかかることを知り落胆したようであった (L. リチャーズ書簡: LR to NGC, 1886.1.27)。しかし休む間もなく、宣教看護婦の初仕事として、京都在住の婦人宣教師の転地療養への個人付き添い看護のため、上海に向けて離日した。約 2 ヶ月後日本に戻ったが、その夫人は転地療養の甲斐なく、

不幸にもアメリカに帰国途中で自殺する。彼女は、慣れない上海での付き添い看護の日々を過ごし、そして夫人の死に直面したのである。深い悲しみとともに身も心も疲労困憊し、これからの活動に対して戸惑いを持ち、不安が募っている様子がうかがわれた。それでも、L. リチャーズは、神戸でしばらく休養した後、E. タルコットと共に岡山に向かい、伝道活動に参加した。彼女は、来日して間もない宣教師としては新人であったために、他の宣教師たちの活動を垣間見て、今の自分は役に立てていないと苦しく感じながらの日々であったようだった (L. リチャーズ書簡: LR to NGC, 1886.7.30)。この彼女の心を支えたのは、ABCFM の宣教師たちであった。特に、L. リチャーズにとって、E. タルコットは神戸に到着してから京都に行くまでの多くの時間を共に過ごし、彼女が前に進めるように支援し続けてくれた存在であったと思われる。E. タルコットは、長年日本での伝道や教育活動などを広く経験したいわばベテラン宣教婦人であった。彼女は、宣教師としては新人の L. リチャーズに対し、岡山など各地での伝道活動のノウハウを親身に伝えたことと想像できる。このように L. リチャーズは、地域の人々との交流や ABCFM の宣教師ネットワークの中での伝道活動を通して、宣教師としての未熟さを痛感し、不安な日々をすごすことになるが、看護婦としての使命感が消えることはなかった。

## 3) 日本での近代看護の種をまく

L. リチャーズたちは、岡山滞在中、コレラが大流行したため隔離された。彼女は、直ちにコレラの避病院で働く旨を行政に申し出たが、丁重に断られた。しかしその申し出が美談として地元の新聞で紹介され、それにとどまらず、当時女性の地位向上や自立を考える人々が読者層であった女学雑誌に、簡単ではあるが L. リチャーズのこの行動が紹介された。この記事がどれぐらいの反響があったかはわからない。しかしながら、一地方のこの出来事が取り上げられたのには背景事情があった。この明治から大正にかけて、日本では全国的にコレラが周期的に大流行したからである。1886 (明治 19) 年も各地で大流行し、多くの人々が死亡している (岡山市百年史上巻, 1989, pp.330-341)。国をあげてその対策に追われ、その中でも予防対策や避病院での適切な治療など、近代的な医療の整備・充実に注目されていた時代であった。そのような時に、アメリカから訓練を受けた看護婦が京都での看護婦育成のために来日し、しかも岡山の避病院での

看護を果敢に申し出たことで、その名は広がり、しっかりと訓練された看護婦育成の必要性を語るよい事例となったのではないだろうか。

後年、看病婦学校の設立者新島は、『病院や看病婦学校の有益さと重要性が人々に理解された理由の一つとして、コレラとチフスの流行時に優秀な医師と訓練を受けた看護婦の必要性が痛感されたこと』と述べている（アメリカン・ボード宣教師文書, *The Annual Report of the Doshisha Mission Hospital and Training for Nurses*, 1887, p.183）。いずれにしても、日本における近代化の流れに沿って、人々の健康をまもるための様々な方策が進められていく中で、専門的な看護を経験してきた彼女にとってはごく自然な行動が、近代的な看護実践・教育への種まきであったようにも思える。

## 6. おわりに

L. リチャーズは、1886（明治19）年1月に来日してから京都には留まらず、その年の夏まで上海や岡山などに赴き、ABC FMの宣教師ネットワークの中で宣教看護婦としての役割を少しずつ果たしながら過ごした。この間の経験は、彼女の抱いていた宣教看護婦としての夢と現実の狭間で、喜びを感じつつも戸惑いと苦悩の連続であったのではないかということがうかがえた。この年の秋の始まる頃、彼女は京都の地でいよいよ看護実践と教育を開始することになる。その時、彼女はアメリカとイギリスで長年培ってきた看護キャリアをやっと発揮できる時がきたことに安堵し、期待をもって取り組んでいったと思われる。あわせて、来日してからの様々な体験を通して、新たな挑戦となった宣教師としての使命をどのように果たしていくのかをも、より鮮明に実感していたにちがいない。これらのことは、その後の京都での宣教看護婦としての活動に繋がっていくこととなる。

## 文 献

アメリカン・ボード宣教師文書 *Correspondences of the American Board (ABC FM) 1869-1896*（同志社大学人文科学研究所蔵、マイクロフィルム）。

L. リチャーズ書簡：LR to Dr. Alden, 1885.9.8  
L. リチャーズ書簡：LR to NGC, 1885.11.18  
L. リチャーズ書簡：LR to NGC, 1885.11.26  
L. リチャーズ書簡：LR to NGC, 1886.1.27

L. リチャーズ書簡：LR to Mr. Word, 1886.1.28  
L. リチャーズ書簡：LR to NGC, 1886.7.30  
J. ベリー書簡：JCB to NGC, 1885.5.4  
J. ベリー書簡：JCB to NGC, 1886.1.28  
J. ベリー書簡：JCB to NGC, 1886.3.20  
J. ベリー書簡：JCB to NGC, 1886.4.20  
J. ベリー書簡：JCB to NGC, 1886.8.26

*The Annual Report of the Doshisha Mission Hospital and Training for Nurses, in connection with ABC FM Mission, Kyoto Japan (1887)*. 183.

遠藤恵美子, 山根信子（1984）：佐伯の学校の卒業生たち。京都看病婦学校・京都産婆学校。125-170。東京：中野美術印刷。

女学雑誌社（1886）：京都看病婦学校。女学雑誌。25：214。26：227-229。リンダ・リチャード。女学雑誌。29：276。

亀山美知子（1988）：日本における看護婦養成の開始とミッションのかかわりについて。日本看護歴史学会誌。1：20-30。

神戸市文書館蔵（1868-1905）：ヒョーゴ・ニュース：The Hiyogo News（複写）

1886.1.30 付

1886.4.5 付

1886.4.7 付

Linda Richards (1911): *Reminiscences of Linda Richards, America's First Trained Nurse*. 1-121. Boston (USA): Whitcomb & Barrows.

この書は、尾田葉子により翻訳され、「リチャーズの回想記 [1-10]」として、雑誌看護の科学に、以下のように連載。掲載号は次の通りである。

「リチャーズの回想記 [1]」（1976）：看護の科学 . 1 (10) : 60-66.

「同 [2]」（1977）：看護の科学 . 2(1) : 57-66.

「同 [3]」（1977）：看護の科学 . 2(3) : 45-51.

「同 [4]」（1977）：看護の科学 . 2(6) : 54-58.

「同 [5]」（1978）：看護の科学 . 3(2) : 67-70.

「同 [6]」（1978）：看護の科学 . 3(5) : 67-73.

「同 [7]」（1978）：看護の科学 . 3(7) : 67-73.

「同 [8]」（1978）：看護の科学 . 3(9) : 51-54.

「同 [9]」（1978）：看護の科学 . 3(10) : 70-72.

「同 [10]」（1978）：看護の科学 . 3(12) : 52-55.

本井康博, 岡山寧子, 石川立（2015）：鼎談 同志社医学教育の歩み－同志社病院と京都看病婦学校－。同志社時報。139：8-23。

M. M. Riddle (1928) : *Boston City Hospital*

- Training School for Nurses Historical Sketch, 1878-1923. 41-21. Boston (USA) : Boston City Hospital Nurses' Alumnae Association. 1886.1.23 付
- M.E.Doona (1996): Linda Richards and Nursing in Japan, 1885-1890, Nursing History Review. Official Journal of The American Association for The History of Nursing. 4 : 99-128. Pennsylvania (USA), University of Pennsylvania Press. 1886.1.30 付
- V. G. Drachman (1984): Hospital with a Heart, Women Doctors and the Paradox of Separation at the New England Hospital 1862-1969. 21-43. London (UK): Cornell University Press.
- 森永長壹郎 (2004) : J.D. デイヴィス夫人の死に関する資料, 同志社大学人文科学研究所 (編), 同志社大学人文科学研究所研究叢書XXXVII アメリカン・ボード宣教師－神戸・大阪・京都ステーションを中心に, 1869-1890-. 327-35. 東京: 教文館.
- 岡山寧子, 依田和美, 竹中京子 (2006) : リンド・リチャーズ像に迫る－ザ・アメリカン・ジャーナル・オブ・ナーシング誌の記事から－. 第26回日本看護科学学会学術集会講演集: 271.
- 岡山寧子, 依田和美 (1996) : 女医スーザンダイモックとアメリカ初期の看護教育について. 京都府立医科大学医療技術短期大学部紀要6: 21-26.
- 岡山寧子 (2021) : エリザベス・ブラックウェルとナイチンゲール (看護教育における接点と分岐点). ナイチンゲールの越境4「時代」. ナイチンゲールが生きたヴィクトリア朝という時代. 135-146. 東京. 日本看護協会出版会.
- 小野尚香 (1999) : 10章 京都看病婦学校と宣教看護婦リンド・リチャーズ. 同志社大学人文科学研究所 (編). 来日アメリカ宣教師－アメリカン・ボード宣教師書簡の研究 1869-1890-. 329. 東京, 現代史料出版.
- 岡山市百年史編さん委員会 (1989) : 岡山市百年史上巻, 第三部衛生と治安 第二章保健と衛生 第一節 明治期の保険衛生 1 伝染病の流行. 330-341. 岡山市.
- 山陽新報社 (1886) : 山陽新報第2133号. 1886 (明治19)年6月24日付. (マイクロフィルム). 岡山.
- 齋藤元子 (1999) : 19世紀後半アメリカにおける女性の領域と女性海外伝道運動. お茶の水地理. 40:33-38.
- 依田和美, 岡山寧子 (1993) : アメリカにおける最初の看護婦学校に関する論争. 日本看護歴史学会誌. 5 (1) : 1-15.
- 横浜開港資料館監修 (2007) : ジャパン・ウィークリー・メール復刻版 Part 4, Japan Weekly Mail, 東京, 紀伊國屋書店.